

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (21) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

目下(3月)、新型コロナウイルス感染症が世界各地で流行しているが、関連して「流れること」が原義のプラスα Basic 語 *influenza* は *fluent* (流暢な)、*influence* (影響) などと同系である〔他の同系語の例は本連載(8)の①、また拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(145)参照〕。英語も短期間でまさに流れるように *fluent* になる方法はあるだろうか？

すでに就任以来3年2ヵ月となる Trump 大統領であるが、本連載では時系列をさかのぼりその就任中の軌跡を追うなか、今回は次の短い tweet 例をたたき台に、英語の「音声」や「発音法」に関して触れてみる。ネイティブスピーカーでもない者が、英語の音声・発音法(enunciation)を実践面から人にあれこれ説き示すことには心情的に僭越さを感じ、本当は差し控えたい思いではある。日本人が実践しようとする DM (direct method) などにも筆者は抵抗感を抱く。本連載との関わりからは Chomsky, N. and Halle, M. (著) (1968)の有名な *The Sound Pattern of English* [SPE]などは有益な参考文献となる。

今回特別に少しだけ、日本語にある膨大な数のカタカナ日本語とこれの英語での音声・発音の視点から考えてみるが、「音と意味の一体化」が元々の一貫した趣旨である。

Christmas Eve briefing with my team working on North Korea — Progress being made. Looking forward to my next summit with Chairman Kim! (December 24, 2018)

▲Trump 氏が 2018 年の Christmas Eve に北朝鮮問題担当者から状況の進展の報告を受け、金委員長との次(2回目)の首脳会談を心待ちしているという内容であった。

まずは語釈の観点から太線の un-Basic 語 *next* の原義を押さえておくが、*next* は Basic 語 *near*, *connection*、プラスα Basic 語 *neighbor* (隣人)、un-Basic 語 *annex* (アネックス・別館) などと同系である。*near* {*ne* (= *near*) + *ar*} の *ar* は印欧祖語 PIE での比較級の接辞で、*next* の *-xt* が最上級の接辞であったとされている。*next* は *nearest* (最も近い) が原義である〔同上拙著、第二部、例(96)参照〕。

上の tweet 中の英語はクリスマスイブ、ブリーフィング、チーム、ワーキング、レック、フォワード、ネクスト、サミット、チェアマンと**カタカナ語**にもなっているものばかりである。日本人にとって英語は徹底的に日英語を対比的にとらえるのが手早い、このあたりの事情を最も実感しているのは日常的に日英語の対照研究(contrastive studies)に専門に取り組んでいる大学教授など研究者や、日英語間の通訳者/ 翻訳者(interpreter/ translator)であろう。日英語の対比の効用は統語面、音声面の両方に当てはまる。

音声に関して語のレベルで言えば、**カタカナ日本語(外来語)などとその英語の発音法(enunciation)の対比**は両者の違いを実感することになり要領がよい。たとえば日本語を知らない英語のネイティブは地名の東京(Tōkyō)は前後の *ō* を [ou] と二重母音化させ [tókoujou]、京都(Kyōto)は *k* と *y* の間に母音 [i] を入れ [kijoutou] のように言う。東海道(Tōkaidō)は *Tō* の *ō* を [tə] 音で [təkaidou] と言うはずである。空手(karate)は [karáti] であり、文脈がないと一瞬「空手」のこととは思えないような音を発する。

こういう違いを手早く示す好例は、アメリカ 50 州の名や世界の国名・都市名などのカタカナ発音と英語発音の対比である。ただし、問題は日本生まれの日本育ちの日本人には所詮は英語のほうの発音が心もとない。通じるレベルのもので、本物ではない。ネイティブや、生まれは日本でも本国育ちの人の発音法・呼吸法とは根本的に違う。かつて筆者が注目した二世が旧ラジオ関東〔現ラジオ日本〕で DJ を務めたケン田島(Ken Tajima)氏と、在日アメリカ大使館の通訳官であった西山千(Sen Nishiyama)氏で、2人は確かなインフォーマント(informants)であった。ケン田島氏は今なお健在である。

筆者の知る限り、生粋の日本人英語教師で本当の英語の発音がみずからでき、他人に偽物ではない発音法を教示できた人は1人しかない。その人とは喜劇風物まねの名人で、かつてテレビ番組に羽織・袴姿とともに、見事に跳ね上がったひげ（実は付けひげ）をたくわえ、明治時代の英語教師の演出で「ゴキゲンヨウ」の挨拶とともに明治調の言葉で語り、「ひげの先生」として一世を風靡した五十嵐新次郎・早稲田大学教授である。五十嵐氏は「発音できた」英語教師であった。氏は英語の音(sound)に耳が開いていた。

1960 年代初頭（昭和 30 年代半ば）に始まったテレビ英語講座で、ある日、出演タレントがカタカナ語の「ミルク」とまず言い、そのあとに顔は画面に映らず voice-over（かぶせ声）で五十嵐氏の英語が対比的に milk と聞こえ、つづいてタレントが「ジャム」、そしてまた五十嵐氏の発音で jam が聞こえ対比的にいくつも示されていく場面があったが、氏の発音はまさに本物に響いた。氏は**日英語対比の手法**を用い英音を教えた。

またラジオの英語講座で、五十嵐氏は極東米軍放送 FEN（現 AFN）のアナウンサーの英語を声帯模写的に披露したことがあった。*This is the United States Air Force Radio Service, the voice of information and ^` education. And this is the Far East Network,*

and ^` this is Tokyo! と本来は弱音の and も強音化させるとともに、特別に DJ 調の躍動的リズムに乗った、野生的なヤンキー英語の音色・声色でサマになっていた。

さらにテレビ講座のほうで、五十嵐氏は画像と効果音を取り入れての野球のワールドシリーズの実況放送を真似たことがあったが、これにも驚いた。もう音源は手元にないが記憶の範囲内で復元すれば、おおよそ次のようなものであった。*San Francisco Giants and New York Yankies, 3 to 2. Took 2, Giants' lead. Yankies' runner now on third and ... Boy! It's reached the stands! Reached the stands! Whoof! ... Here was a grand homer in the second half of the ninth inning! Yankies' victory!!*（サンフランシスコ・ジャイアンツ対ニューヨーク・ヤンキーズ、3対2、ジャイアンツ2点を取りリード、ヤンキーズの走者は三塁 ... アーッ！ 観覧席に入った！ に入った！ ウワー！ ... 九回の裏で見事なホームラン！ ヤンキーズの勝ち!!）。これは Yankies の逆転サヨウナラホームランである。野球用語は、カタカナ語ばかりである。

五十嵐氏のこのときの発声法はまったく別人の声に響き、まさに本物のアメリカ人スポーツ実況アナウンサーの感じであった。当時、国語学者・金田一春彦氏も五十嵐氏のあの日本人ばなれした英語発音は天下一品と評していた。

またラジオ講座のほうで、酔っぱらい運転をした運転手に“*You must not be drunk while driving!*”と注意する警察官を真似た英語、自動車運転に関連するが“*We are running out of gas!*”（ガソリンがなくなってきた）、『アリババと 40 人の盗賊』に出てくる「開け、ゴマ!」“*Open sesame!*”等々、まさに本物の響きと迫力であった。ここで

の「ドライビング」、「ガス」、「オープン」も完全に日本語化している。

冒頭で、ノンネイティブの立場の者が「英語の音声」に関し実践的に説くのは本当は好まない旨を言ったが、... **drunk while driving**！の例では **drunk** の末尾子音[k]音から次の **while** の初頭子音[hw]へと連鎖移行(glide)するとき、[k]の部分で息を一度完全に吐き捨てる必要がある。次の[hw]との瞬間的連鎖音[k^hw]とするところに **fake** でない本物の英音か否かの違いがでる。そして **driving** の末尾の音節部[vin]では後舌を軟口蓋につけ閉鎖させる鼻音化([^h])と同時に、もう一度息を余すことなく抜き、吐き捨てるのである。

“**We are running out of gas**!” では[wiaːˈrʌniŋˈaʊtəˈgæs]のようにほぼ一口になるのが真の音で、**running** の末尾でまたも[niŋ]と鼻音化させ、末尾での[gæs]でこれまた存分に息を吐き切らねばならない。息を存分に出すため実際には[gæːs]のようになるのが真音である。日本人の英語母音[æ]の発音は息が肺に残ったままで真の英音にならない。

関連して昔、西部劇映画を観ていて俳優が “**That’s a giraffe** !” (あれはキリンだ!) と言ったときの **giraffe** 中の母音[æ]に英語の真音を聴いた気がして大変感激したことを思い出すが、まさに五十嵐氏の[gæs]の[æ]の発音はバリトン調で野生的な脂っこいものであった。氏は英語の **voice training** を受けた人でもなく、自分で英語の母音をモノにするのに4年かかった旨を著書『英米発音新講』の中に記しているが、あの“**We are running out of gas**!” の一口的本物発音も半世紀以上経た今も耳に鮮明に残っている。

“**Open sesame** !” では語 **sesame** の最初の音節部[sé]で息を余すところなく、肺活量目いっぱい完全に吐き捨てる必要がある。少しでも **Open** の直前で吸った息(吸気)が残っていると本物でなくなる。さらに末尾の音節部[mi]でやはり十分鼻音化させ、またも息を吐き捨てるわけである。五十嵐氏の英音はそういう「真音」であった。

氏のテレビ英語講座、講演、ソノシートなど音源のいくつかは今なお手元に残っているが、ここで引き合いに出した例の音源がもうないのが実に残念である。手元にある音源は当時オープンリールのテープレコーダで録音したものを、その後にカセットテープにダビングしたものである。貴重なもので、今もたまに聴くことがある。

英音は口を使ってはいけないのである。五十嵐氏は口の開きが狭く、まるで口は開かない人で、咽喉(pharynx/larynx)と鼻腔を使っていた。喉と鼻から吸気を吐き切っていた。腹話術的(ventriloquial)、物まね調で、その音色はまるでネイティブであった。

筆者が学部学生の頃、LL 教室でのテキストに次の文の発音法に関するものがあつた。実際にこの文を1度だけ聴かされたことを覚えているが、まさに西部劇映画でハリウッドスターが咽喉から発する典型的米音であり、その生の音に大変感銘した。その文は **He got angry when he pointed out that he had an eight-hour duty.** で、意味は「彼は8時間勤務だと指摘したとき怒った」である。この文だけでは状況はやや不明確に思うが、あまり深く考える必要はない。調音法と聞こえ方・響き方が重要である。

この文は [hiˈgɒtˌæŋɡriˈweniˈpɔɪntɪdˈaʊtˌðætɪˈhædənˈeɪtˈaʊəˈdjuːtɪ] のように、呼気と歯茎音[t]などによりリズムの谷間ができ、一瞬ブレーキのかかったような、息の詰まったような音圧で流れるのが本来の英音(特に米音)となる。ここでの発声要領としては直前に息を吸い込み、[áu]まではその息を吐きつづけ、[áu]の[t]の直後(縦線の¹で示した部分)で息を肺から残らずすべて吐き捨て、同時にその瞬間にまた息を吸い込み、その息を最後の[djú:tɪ]までまたも吐きつづけ、末尾の[tɪ]で残らず息を肺から吐き捨てるのである。そうするとこの文の本物調でリズムカルな英語の真音となる。筆者はこの要領をエンジンの4工程にたとえ **i) 吸気**→ **ii) 圧縮**→ **iii) 爆発**→ **iv) 排気**と言っている。

日本人は英語のどの部分でも口元でボツボツと断続的に息を吸ったり、吐いたりする

ので調子外れ(out of tune)となる。英語音声の扱われ方はいかに発音するかの articulatory phonetics (調音音声学) 風ではなく、どのように聞こえ響くか?という脳科学的・物理学的な auditory [acoustic] phonetics (聴覚〔音響〕音声学) の追究が望まれる。

ネイティブの本物の調音法とともに、英音が聴取できるか? 五十嵐氏は英音に耳が開いていてそれを聴く聴覚脳を実際にもっていた人で、英語の音声について人に語ることでできた英語教師であった。発音に関し説く日本人の英語発音はどこかに必ずこだわりも感じられ自然でない。今日、教師ではなく音楽評論家の小林克也氏などは英音に耳の開いている日本人だと思うが、米軍放送や DJ 調の咽喉英語発音のできる人である。本物の英音に耳を開くには、たとえば洋画・喧嘩・雑踏の中での街頭インタビューなどライブの音環境での英語音声から音素をすくい取り、収集し、英音聴取の聴覚改造が必要となる。市販のいわゆる語学テープをモデルには、英語の本当の呼吸法を身につけることは難しい。本国の空港に着いた瞬間、また一步街路へ出た瞬間から戸惑うこととなる。

ところで、声(voice)の抑揚としてのいわゆる intonation は英語力とともに自然と感情移入(empathy)もできるようになる。元々が曖昧な intonation / pitch を執拗に追うと混乱を起こし危険なのである。以前からたびたび触れたのであるが、日本人にとり英語の intonation は聴取も簡単でそれほど問題ではない。日本人は無意識に英語のよく聞こえる intonation (高低の声の抑揚・口調)ばかりをフワフワと聴いている。日本語民族の聴覚で英語で問題なく元々よく聞こえるのは高低の intonation であり、聞こえないのは強弱リズムに乗った sound (音)なのである。別な言い方をすれば、気づかれないが英語で日本人によく聞こえるのは intonation だけである〔同上拙著、第三部、pp.221-222 参照〕。ほんの 1 例で Basic 語 flame と frame の音声の違いがあらゆる音環境で明快に聞こえるか? 同じように聞こえるのが日本人の民族聴覚である。sound を 1 音 1 魂の absolute hearing (絶対聴取) で取り込み、word としては 1 語 1 魂で原義と語法を追うわけである。

なお、intonation は本連載(15)の(1)などともつながるが、morphophonemics (形態音素論: MP 論) 的には PIE etymon /TEN/ に由来し Basic 語 **tendency, thunder** などとも同系であるし、プラス α Basic 語の *tent*、un-Basic 語の tone, tune, tenor (テノール) などとも同系〔他の同系語の例などは同上拙著、第二部、例(19)参照〕。